

東三河地域の水源

～ 豊川用水ってなに？ ～

○はじめに

東三河地域の生命線とも言われる豊川用水は、平成30年6月に**通水50周年**を迎えます。そこで、通水50周年を迎えるにあたり、全6回に分けて豊川用水をご紹介します。初回の第1回については、豊川用水の概要をご紹介します。

大島ダム（貯水量 11,300 千 m³）

○豊川用水の「みずがめ」

豊川用水には、水源として愛知県新城市川合にある**宇連ダム**と同じく新城市名号の**大島ダム**の2つのダムがあります。さらに夏の間、宇連ダムの貯水量が少なくなった時に佐久間ダム（静岡県）から天竜川の水を豊川へ送ることもできます。通常は宇連ダムと大島ダムの周辺に降った雨を貯留し、農業用水や工業用水、上水道に利用しています。



春の大野頭首工

○東部幹線水路7.6km、西部幹線水路3.6km

愛知県新城市大野にある**大野頭首工**により豊川の水を取水し、延長約11.2kmもある幹線水路を使って、東部幹線水路は田原市の伊良湖町、西部幹線水路は蒲郡市まで豊川の水を運んでいます。

豊川用水は県内の豊橋市、豊川市、蒲郡市、田原市、新城市や静岡県の湖西市で、**農業用水・工業用水・上水道**として使われています。



○みずの有効利用

最初にお話したように豊川用水には2つのダムがありますが、常にダムに満々の水がある訳ではありませんし、ダムのある場所と違うところでたくさんの雨が降る場合もあります。そこで、豊川用水には地区内に水を貯める調整池が7つあります。調整池とは、ダム以外の地域で降った雨を豊川用水の施設を使って調整池まで運び、貯めておく施設です。そのままでは川から海に流れ落ちてしまう雨水を調整池に貯めることで用水として使うことができ、**みずの有効利用**が図られています。



初立池（写真左）と地区内最大の万場調整池（写真右）

○さいごに

豊川用水は昭和43年の通水以来、東三河地域に用水を運び続けて今では無くてはならない施設となりました。そんな豊川用水ができるまでの苦労を次回「**豊川用水のはじまり**」でご紹介します。